

萩原明巳が長谷川亜麻音と付き合い始めてから約一週間が経過した。

「長谷川、早くしろよ。学校遅刻すんぞ」

「うん」

亜麻音は頷くが、ただ頷いただけであった。だからそれに対して明巳は、

「うん、じゃねえよっ！ 早くチャリの裏乗れっ！」

「あ、うん」

そこでようやく亜麻音は、自転車の荷台に乗らなければ、という命令が脳に届き、動きだす。亜麻音は紺色のスカートをやつくりと押さえながら荷台に腰掛け、短く切りそろえた髪の毛——それを彼女は耳にかける動作をした。ちらりと、か細く白い腕が覗いた。それらを網膜にしっかりと焼きつけた明巳は前を向く。

「乗ったよ、明くん？」

「しっかりとつかまってるよ。こないだみてーに落ちんじゃねえぞ」

そうして明巳はペダルに力を込めた。ペダルは勢いよく回り、車輪は地面を蹴るが、あまりバランスが取れない。明巳は立ち上がって、さらに勢いよくペダルをこいだ。荷台にかかる亜麻音の重さは、女の子にしてはとも軽い部類であるが、それでもやはり重さが0というわけにもいかなく、どうしてもペダルをこぐ力を強めなければならない。

「わわわっ」

亜麻音の声と共に、急に荷台が軽くなったのを明巳は感じた。その後、背後でドシンと鈍い音が響く。それが何だか明巳には可愛らしい音に聞こえた。そしてその音の発生源は——振りかえらなくてもわかる。これは亜麻音が落ちた音だ。明巳は溜息をつきながら、自転車を停止させた。

「おい、だいじけ？」

慌てて、荷台から落ちた亜麻音の傍までかけた明巳はそう問いかけた。

スカートに隠れている小さなお尻を押さえている亜麻音は涙目になりながら、

「うん、だいじだいじ」

と言つて笑った。目もとに涙がにじんでいたが、それはくもりなく爽快な、にへにへ笑顔だ。これは亜麻音の得意顔で、何かバツが悪そうな時に——何かを許してもらいたい時に懇願する女のような、悲哀を誘う顔をする。これを意図的にやる女は多いが、亜麻音はそれを自然に、かつとても可愛らしくおこなうのであった。それは天然の小悪魔的な存在と言えた。そんな笑顔を見て、明巳は、

……なんで俺、付き合うなんて言っちゃったんだろ。

実をいうと明巳は亜麻音がそこまで好きではなかった。ただ同じクラスにいる、ちよつと目のひく可愛い子、という認識があっただけなのだ。だが、いざそんな子を目の前にし

て、告白を断るなんて愚行、思春期の男子には到底出来ないことであつた。

……これから俺たちの関係、どうなつてくんだろ……。

明巳は、亜麻音の笑顔を見つめながら、再び溜息をついた。亜麻音にそれを悟られぬように。もつとも、その溜息に気づくほど亜麻音は賢くはなかつた。

\*  
\*

とある日の放課後の事。

「長谷川、今日マックよつてくべ」

「え、あ、うんっ」

明巳にとって、放課後に亜麻音と寄り道をしていくことは非常に珍しかった。たとえそれがあつたとしても、学校の近くのコンビニでジャンプの立ち読みだったりと、とても彼女連れでする行為ではなかつた。けれど、こういう風の吹きまわしか、今日の明巳は亜麻音をマックに誘つたのだ。

そしてマック。

「俺、先に席取つてるわ。なんか適当に注文しといてくれ。後で払うから」

「うん。わかつたー」

放課後ということもあつてか、他校の制服を着た生徒たちが入り混じつており、それぞれが談笑しあつていた。大声で馬鹿みたいな話をしているものもいれば、静かにクスクスと頬笑みながら仲良さそうに話をしているものと様々だ。

適当に二人掛けの席を取り、明巳は亜麻音を待つた。

数分後、

「おまたせー」

明巳はにこにこ笑顔でトレーを運んでくる亜麻音から視線を外し、持っているトレーへとやつた。そこには――

「おい」

「え?」

トレーには、山盛りになつたハンバーガーがあつた。積み上げられたそれはパツと見ただけで、十個以上はありそうだ。亜麻音の顔を覆い隠そうと、ただ無造作に積み上げられている。

「何でそんなに買つてくんだよっ!？」

「明くん男の子だし、いっぱい食べると思つて」

テーブルにトレーを置いて、えへへと後頭部をかきながら亜麻音は笑う。かすかにハンバーガーの山が崩れた。

「そんなに食べるわけねえだろ……」

「ええ……?」

小動物のように顔をかしげ、じゃあ、と亜麻音は続けて、

「私が食べるからだいじょぶっ」

胸を張って、鼻から息を大きくはいいた亜麻音は、まさしく大船に乗った気でいなさい、と言わんばかりの表情であった。閉じられた目蓋の周りは、輝きに満ちている。

……一体何が大丈夫なんだろうか。

「ねえ、明くん」

「ん？」

ガサゴソと、そしてモソモソ。頬にたくさんの食べ物を詰めながら亜麻音は明巳に尋ねた。口の中に物が入っているはずなのだが、器用にそれをこぼさずに話す亜麻音はまさにハムスターだ。

「どうして私と付き合ってくれたの？」

なんだかその質問は、明巳の心に突き刺さるようなものであった。なんなんだよその質問は、と苦虫をかみ潰した感覚を抱きながら明巳は、

「……可愛いから」

そう言っただけで対面に座る亜麻音を見るが、どうにもハンバーガーに夢中なようで、明巳の顔などちっとも見えてはいなかった。おいちゃんと話を聞け、と明巳は思いながら、

……なんだかなあ。

そして。

「それだけ？」

少し遅れて、ハンバーガーから視線を外した亜麻音は、純粹な瞳をばちくりさせながら明巳を見つめ、首を折り曲げた。きっと、その台詞の後にもっと何かが続くと思っていたのだ。

「おう、それだけ」

「それだけっ!？」

亜麻音は大きな声を上げるが、口元にケチャップが付着しており、非常に間抜けにしか見えなかった。というより、亜麻音は実際、非常に間抜けなのである。

「じゃあ、逆に聞くけど、なんで長谷川は、俺に付き合ってたんだよ？」

明巳は微妙に頬が熱くなるのを感じ、視線をそらしながらそんな質問を投げた。

そして、両手でハンバーガーを握りながら亜麻音は、

「えっとね、うん、秘密っ」

にへらーと、頬を崩して笑った。

……うざっ。

そう思いながらも、明巳は、自分の頬が微かに笑みにつりあがるのを感じたのだった。

結局、亜麻音は九個ほどハンバーガーをたいらげた。

\*  
\*

明巳はいつも通りの待ち合わせの駅にて亜麻音を待っていた。ダルそうに、自転車に乗りながら。それはいつもより数十分遅れた時間だった。だがしかし、  
……おせえな。

いつになっても亜麻音が来ることはなかった。

携帯電話を開いて時刻を確認すると、もうすぐここを出発しないと学校へ間に合わない時間帯であった。いつもはこれの五分前くらいにはお互い到着するはずなのに、今日はその気配が全くなかった。もちろん亜麻音からメールも届いていない。

……ま、いいか。

明巳はペダルに力をこめ、学校へ向けて走りだした。

頭の中は亜麻音のことしか考えていなかった。亜麻音のことを考える気持ちだが、自転車の車輪のように、明巳の頭の中をぐるぐると回っていた。

「はあ？ 長谷川が休みだあ？」

「なんか、熱がでたらしいけど」

学校にて、亜麻音が休みであることを知った明巳は、そんなこと、聞いてねえぞ、と心の中で小さく愚痴り、長谷川の友人である平田に対し、妙ないらだちを感じた。平田のその顔（亜麻音と比べたら大トロとガリのくらいの差だと明巳は認識している）には、彼氏だから、そんなこと知ってて当然でしょ？ と書いてあるようで、まさにこれがいらだちの原因の一つであった。そして、もう一つが、何も連絡をよこさなかった長谷川に対して、だ。

……くそつ、なんなんだよもう。

「平田、」

「うん？」

「早退するって先生に言っといってくれ」

「え？ え？」

……なんで俺、あいつのことそんなに好きじゃねえのに、こんなことしてんだろ。

明巳の頭の中は当たり前のように、亜麻音の笑顔だけが浮かんでは、残影を残しながら消える、それをずっとくりかえしていた。

明巳は懸命にペダルをこいでいた。心臓が喉もとまで押しあがってきているような感覚を覚えながらも、必死にペダルを回した。口からは止めどなく息がはきだされ、まるで排気ガスのようだ。疲労により頭が、ただ真っ白になる中、止めどない思考が、ぐるぐると、

まさに登校中のときと同じように、自転車の車輪のごとく、混沌をえがき、

……俺、長谷川のこと——亜麻音のこと、何にも知らねえ！

ただ明巳は、亜麻音の家を目指しながら、そんな短調で混沌な思考を、ずっと回し続けた。

ピンポーン、と平屋に無機質な音がひろがった。その音に遅れて、廊下を走る小さな音が、徐々に大きくなって、玄関がガラガラと開けられた。

そして、明巳はその玄関を開けた相手に対し、

「よう」

と、ポケットに突っ込んでいた手を抜き、軽く挨拶をした。

「わわわっ、どうしたの明くんっ!？」

ピンク色の可愛いパジャマに身をつつむ亜麻音は、どうみても高校生には見えなかった。そんなパジャマを見につけるのなんて、きつと小学生くらいだろ、と明巳は思うが、ただどそれがとても似合っていたので、自然と笑みがこぼれた。

「とりあえず、お邪魔するわ。つか、お前寝てなくていいのかよ？」

長谷川家にお邪魔するのを亜麻音に何度か止められたが、それでも屈することなく——いや、ただ無視して、ずかずかと明巳は家にあがった。

亜麻音の部屋は一言で言えば可愛らしかった。またはとても亜麻音らしいとも言える。ピンクを基調としたその部屋は、ぬいぐるみや、小物がたくさん並べられており、とてもメルヘンで、女の子らしい部屋である。

明巳はベッドに亜麻音を寝かせ、適当にカーペットの上に座り、

「なあ、俺さ」

言葉が続ける。

「俺、長谷川のこと、なんも知らねえ」

もう一度なんも知らねえ、と呟き、

「血液型だって、家族構成だって、趣味だって、特技だって、何が好きなのか、何が嫌いなのか、何も知らねえ」

それはつまり、

「俺、亜麻音のこと、なんも知らねえ」

亜麻音は、ただ黙って、静かに目を閉じながら、明巳の言葉に耳をかたむける。

「けど、その、なんだ」

徐々に熱くなりつつある頬をかきながら明巳は、

「……俺に黙って休みなよ、学校」

そして、わずかな沈黙がながれた。心地よい沈黙だ。二人だけの空間に、優しい何かがふわりと漂うような感覚。それをさらにまとめあげるかのように亜麻音は、

「うん、ありがと……」

と小さく言った。

「なあ、亜麻音」

「なあに？」

二人は顔を紅潮させ、視線を交わせることなく、言葉が続けた。きっと、今だけは、二人の心が、付き合ひ始めてから初めて繋がったような気が——二人は、そう感じていた。

「熱、だいじか？」

「うん。だいじだいじ」

そっか、と明巳はつぶやいた。

\*  
\*

萩原明巳が長谷川亜麻音と付き合ひ始めてから約二週間が経過した。

「ほら、亜麻音、はやく裏乗れって」

「うんっ」

だが——

「わきゃっ」

亜麻音は自転車の荷台に腰かけようとスカートに手をかけ、足を上げようとしたのだが、そのままバランスを取ることが出来ず、地面にドシンと尻餅をついた。この光景を終始ながめていた明巳は、今までよく転ばずに乗れたなあ、と思わざるを得なかった。

明巳は「なにやっつてんだ——」と自転車から降り、「よっ」ストップパーを蹴り下げた。自転車は亜麻音よりもバランスよく直立する。

「ほら」

と、明巳は手をのばした。その手を亜麻音は、

「わ、ありがと」

握った。細く白い手でぎゅっと、弱々しく。けれどそれでいて力強く。絶対に離さないように。そして、明巳の力でひっぱられ、亜麻音は腰をうかせ、立ち上がり、スカートの汚れを優しくはらった。

亜麻音は、額にしわがよる明巳の顔を見ながら、

「うん。だいじだいじ。うんっ」

自分に言い聞かせるように一人つぶやいて、にこにこ笑った。さきほどまで涙目だったのに、実に切り替えが早かった。

「じゃ、学校いく？」

「うんっ」

自転車の裏の《自分》の席に亜麻音は座り、二人が乗るそれは、グイと発進した。